
15-薔-

悠-haruka-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

15 - 莓 -

【Zコード】

Z1045P

【作者名】

悠 - haruka -

【あらすじ】

金持ち学校。

美形揃い。

そんな男子校！

親友のあの一言で

人生が変わる

「あの場所から

始まる恋？」

あの日のあの時間

じゃなかつたら

「年下攻め？」

違う人を好きになつて
いればこんなに悲しい

思いはしなかつた

「長年の恋？」

【1】

4月9日。

今日はいよいよ李華高校の入学式（リンカ）。

俺は今日、晴れて高校生になる！

真新しい制服に腕を通して、初めての知らない世界へと踏み込んで行く。

初めての建物。

初めての匂い。

初めての人。

緊張、期待、不安、楽しみ。

色々な気持ちが入り混じって、ムカムカと吐き気がする。

「それにしてもなんだろうこれは……」

校舎の入口を目指し足を進める。

「歩いても歩いても前に進まない！なんで校門から玄関までの道が、こんなに長い！」

「まあまあ、落ち着け。こんな有名な金持ち学校なんだ、敷地が広くて当たり前！どこに移動するにも距離が長くて当たり前！なつ？」

「やつぱり俺は普通の高校が良かつたー！しかも中学も男子校で高校も男子校って、なにが悲しくてこんなむず苦しい…」

「だあーから、そんなこと言つたつて今更だろ？家が金持ちで、中學もある金持ちの聖華中学校セイカに通つてたら、高校は嫌でもここが華美ハナミしかないしな。それにここはイケメンが多いらしいから大丈夫、むさ苦しくないぞっ」

そう、俺たちが通うのは金持ち学校。

金持ちの人ばかりが通う学校だ。

敷地は言つまでもないが、バカでかい。

中学のときから金持ち学校の聖華中学校に通う生徒たちの高校は、自動的にこの李華高校か、姉妹校の華美高校の2択になる。

そして何故か男子校。

イケメンが多いとかそんなことは知らない。

気くわないと！

イケメンって言つたつて、俺だつて男なわけだし。

ときめきがないだろ？！

むすつと膨れる俺を宥めてくる春。^{シユン}

春は幼馴染みで小さい頃から仲がいい。

人懐っこくて周りに人が集まりやすい、いつも春の周りは友達で賑わっているような、人気者タイプだ。

運動できるし勉強できるしおまけに見た目もいい。

背は俺と同じで165cmくらい。と、男子にしては少し小さめかな。

それでもそれ相応にバランスがとれた体格。

元々色素が薄い髪の毛は、明るい綺麗な茶色で、少し長め。

切長の皿に長い睫毛、スッと通った鼻筋、薄く形のいい唇。

いわゆるイケメンってやつだ。

完璧なんだよなあ。

中学2年生のころだったか記憶は定かではないが、言つたことがある。

「春はいいよなあ。運動も勉強もできて、おまけに格好よくて、いつも周りには人が集まつてくる。羨ましいぜほんとつ」

身長は変わらないにしても、俺は華奢な体つきだし、顔だって格好よくなこし、ちょっとコンプレックスだった。

春になりたいいへと言ひつけ、べた一つとくつつきながら言つて、春は少し照れたように笑いながら言つた。

「ありがとう。幼馴染みにそんなこと言われるなんてなつ。でも…」

「ん、でも？」

「俺は海のほうヲが人氣者だと想つな」

「くつ？…ど…がだよつ」

いきなり予想外なことを言われて、声が裏返った。

「その様子じゃ自分では氣付いてないみたいだけど、海は可愛いんだよな。」

べたーっとくついた俺を剥がして、ポンポンと頭を撫でながら春は言った。

可愛い？！俺がつ？

俺、男なんですけどつ！

一人難しい顔をして考える俺に春はビシッと指をさして言ひ。

「そのお母さん似のくつくりした大きい目！通つた鼻筋に綺麗な白い肌！俗に言う女顔！」

「うつ…母さんの遺伝子をしっかりと受け継いだこの中性的な顔、結構気にしてたのに…」

そして俺の髪の毛をシンシン引っ張りながら一気に言へ。

「この、お父さんと同じ漆黒の髪の毛！ 真っ黒だけど柔らかくてふわふわだ！ 少しの風でも綺麗にサラサラなびく！ 白い肌と漆黒の髪、互いに引き立てて見た目は美形！ 運動も勉強もできなくないだろ？」

うん、この父さん譲りの髪の毛は自分でも好きだ。

柔らかくて触つていて気持ちいい。

だからあまり短くしないで伸ばしてみる。

でも春のような明るい茶色も羨ましかったりする。

運動も勉強も、確かに平均よりは少しでもぐるぐるいい。

「でもさ、俺の周りには春みたいに人が集まってくるわけじゃないぜ」

春の一番の羨ましい部分が俺はない。

「あー、綺麗だから近寄り難いんだよ、海は。」

「はい？」

なんですかそれ…

意味がわからなこと、眉間に少し皺を寄せていると、春は続けて言った。

「だつてクラスのやつらが言つてたぜ？」

「……？」

俺はその先の言葉を待つ。

「神絵^{カミエ}、中学はいつすぐの頃より、すこしい綺麗になつたよな。綺麗だから近寄り難い。触れたら壊れそうだ。つてな。」

「はっ？なんだそれ！」

本当に意味がわからない。

触れたら壊れそう？

「ほんだけ儘き美しいもの扱いしてんだよつ！」

この俺を！男の俺を！

「いや、真面目な話。陰で海を好きってやつは、少なくないんだぜ。
襲われんなよなつ？」

……驚愕。

「すつ、好きつて！？男だろつ？！俺も男だ！」

しかも襲われ……ツ

嫌な考えを振り払おうと、一人青くなつて頭を左右に振る。

そんな俺を、ニヤニヤと可笑しそうに笑いながら見てる春。

他人事だと思つて！

悔しくて春を睨みつける。

「ほら、そんな顔しても怖くないんだつて！目が可愛いからなつ」

頭をポンポン撫でながら楽しそうに笑う春。

悔しい…

身長は同じなのー、頭撫でられるしー。

可愛いとか言われるしー。

そんな笑った顔も、春は格好よくて羨ましいしー。

なんていろいろ考えながら俺は春をむーっと睨み続けていた。

そんな会話したこともあつたなー

と、過去を振り返る。

俺は陰でそんなこと言われてたみたいだけど、今思えば春もクラスのやつらにこうひと言られてたな。

「相澤と付き合ってえー。」
アイザワ
相澤

とか。

「春くん格好いいつ！抱いて欲しい！」
とか。

おこおい、抱いて欲しいつておかしいだり…

今更ながらにつつこむ。

「…いつ、海。……ぞつ」

ん？なんだつて？

「おいつ、海！聞いてんのかつ？」

「…あつ、えつ？何？」

まつたく…。と溜め息をつく春。

「着いたぞ、つてー」

一人過去を振り返っていたら、いつの間にか玄関に辿り着いていた
らしい。

「でつ、かいなー…」

今俺たちの目の前にある玄関が、バカじゃないかってくらいでかい。

「ほんと、さすがだなつ。まあどうあえず行こいっせ!」

春はそう言って校舎へと入つて行く。

俺も後を追つて校舎に入り、入学式が行われる体育館へと向かった。

いよいよ入学式が始まる。

新しい生活が始まるんだ。

【2】

『相澤春』

「はい」

入学式が始まり、新1年生の名前が呼ばれていく。

俺は返事をすることに、なんだか緊張していた。

声が裏返つたりじつじょつとか、掠れたじつじょつとか、くだら
ないことで。

『神絵海』

「はいっ

……ああ！

やつちやつた！掠れた！

考えすぎたつ…

案の定、俺は掠れた弱々しい返事をしてしまった。

次々に生徒の名前が呼ばれていく中で、俺は一人肩を落としていた。

そんな俺を、可笑しそうに見てるやつがいたなんて、俺は気が付くはずもない。

入学式も無事終わり、生徒はそれぞれ教室に戻っていく。

悲しいことに、俺と春は違うクラスだった。

ああ…友達できるかな…

俺、春みたいに周りにいっぱい人が集まることとか少なかつたから、結構人見知りなんだよな…

春は、きっともう友達できるんだろうな。

はあつと溜め息を吐く。

そんなことを考えながら、うーんと唸っていたら、隣から声をかけられた。

「なあ、大丈夫？ そんな難しそうな顔して」

「はえっ…？」

うわ、なにやつてんだ俺。

今の一喝抜けな声…

恥ずかしいッ！

「ふつ、入学式のときも返事に失敗してたよな」

「え、あ、うう…」

隣のやつに笑いながらうつ言われて、また恥ずかしくなる。

「俺、**夏野臘月**^{ナツノサツキ}。よろしく、神絵海くん」

そう言つて、夏野臘月はふわっと笑いながら、俺に右手を差し出す。

うわあ……格好いいなあ……

なんだか、春に負けず劣らずだ。

でも身長は、座ってても俺たちより高いってわかるから、もしかしたら全体的に見て、春より格好いいかもしれない。

「…海くん？」

「えっ？ あ、はい！ よろしく！」

ぼーっとその顔を見つめていた俺を不思議に思った夏野臘月は名前を呼ぶ。

我に帰った俺は、ぎこちなく挨拶をして手を握った。

「海くん、やつぱりおもしろいな」

夏野皐月は、可笑しそうに笑いながら俺の頭をポンポン撫でた。

「あの、海でいいよっ？あっ、でもなんで夏野くんは俺の名前…？」

初対面の人には頭を撫でられて、しかも見惚れるような笑顔を向けられることに顔を赤くする。

その上、友達できるかななんて心配してた今だから、声をかけてもられたことにも驚いた。

ああ、バカか俺は…

なに男相手に顔赤くしてんだよ…

そんな俺を不思議そうに見ながら夏野皐月は言つ。

「顔赤いぞ？大丈夫か？それと、俺のことも皐月でいいよ

「あ、うん……臯月」

「うん。それで、海の名前知つてたのは

「

臯月はそこで一度、間をあけた。

「…？」

俺は、その良くなき微妙な間に首を傾げ、田で先を促すように見つめる。

「んー、一田惚れ？」

「…え？」

今、なんて？

「一田惚れしたから名前知りたくて、入学式で呼ばれるときに聞い

てた

…はいつ？！

一目惚れ？！

なんですかそれっ！！

元々大きい目を更に見開き、口を開けたまま固まってしまった俺を見て、皐月はふつ、と吹き出した。

「なーんてなつ！海は可愛いから、からかいたくなるな。まあ入学校で名前覚えたのは本當なんだけど」

なッ……！！

可愛いって……

しかもそんな一コ一コしながら言われても……

やつぱり男の俺が可愛いとか言われるのは、なんだか微妙な気分だ。

それより「冗談かよっ！！

びっくりしたあ…

焦った自分が恥ずかしい。

こいつして、高校にはいって初めての友達ができた。

こんなにほんやく友達できると思わなかつたなあ…

自分でびっくりだ。

なんか、バチ当たつたりとかしないかな？

なんてことを考えてるひかり、HRが終つた。

「よし、じゃあ明日からよひくな。お前らいきなり休んだりすん

なよ？俺に会えないのは寂しいだろ？はい号令

と、なんか教師らしくない担任の言葉を聞いて、日直が号令をかけて解散。

それにしても、教師のくせに格好よかつたな。

見惚れているクラスメートもいた。

自己紹介のときに27歳って言つてたかな。

臯月と話したからあんまり覚えてないけど。

身長は、180くらいにあるだろうか。スタイルがいい。

そして大人の色気を醸しだしている感じだ。

一人でそんなことを考えながら帰る準備をしていると、先に準備を終えた春が、俺たちの教室にはいつてきた。

「つーみーー帰ろーぜー」

「おわつーー！」

突然肩に重みが掛り、躊躇めぐ。

少しバランスを崩した俺の腕を、誰かが支えるようにパシッと掴んだ。

「あ、わりいわりい」

と言つて、笑いながら俺から離れる春。

「つたぐ、お前は。いきなりだと対処が遅れるだろ？・まあ大丈夫だ
つ

「ちゃんと限度考えて行動しないと危ないだろ？」

まあ大丈夫だつたからいいけど。

と、言おうとした俺の言葉は腕を掴んでるやつに遮られた。

俺を支えて、声をかけてきたのは皐月だった。

「あ、すんませ…、って、でかッ！…！」

危ないと注意されたことに謝りつと振り向いた春は、皐月の背の高さに驚いていた。

「あ、皐月だつたんだ！支えてくれてありがとう。春、この人は夏野皐月。さつき声かけてくれて友達になつたんだ！」

そつと置いて俺は皐月を紹介した。

うん、まあ春が驚くのも無理はない。

さつきは座つてたから、俺もそこまで氣にしてなかつたけど、立ち上がつてる皐月は本当に背が高い。

今更驚いた。

俺たちは、軽く20㌢差くらいはあるんじゃないだろうか。

「あ、俺、相澤春。海とは幼馴染みなんだ。よろしくな！」

はつと気付いたように、春も名前を言つて鼻円に右手を差し出す。

「ああ、よろしく」

差し出された右手を、あのふわっとした笑顔で握る鼻円。

「くつ……」

ん？

なんか今、春が変な声を出したぞ。

「あ、春、顔真っ赤だ」

春の顔を覗き込んで囁く。

春は皐月の笑顔に魅せられて、真っ赤になっていた。

すると春は、サッと皐月から手を離して、俺の肩に腕を回しながら小声で話してくれる。

「なあ、皐月って、めちゃくちゃイケメンだな?」

うん、それは俺も思つ。

「イケメン過ぎて恥くないですか、先輩?」

と、ふざけたよじ返す。

それに春ものつけて返事をする。

「なんかわかるな。オーラがな。イケメンオーラがちょっと恐いな、
後輩」

顔を寄せたりして口づきながら、ふざけた口づきで口づき話を。

そんな俺たちを不思議に思った皐月が、いつの間にかすぐ後ろに立つていた。

皐月は突然、俺たちの頭をクシャクシャと撫でた。

「んわっ！」

「うあっ！」

いきなりのことをびっくりした俺たちが、勢いよく同時に後ろを振り返る。

そこには二つ三つ笑いながら俺たちを見下ろす皐月。

うわあ……

ほんとでかいなーんちへしょー！ー！

……じやなくて

「ん、臥月？」

「どうしたんだ？」

俺たちはわけがわからなこと田ドレ訴えながら、臥月にしゃべったのかと聞く。

そして臥月の口から出た答えは

「海も春も、ちひりへて可愛こなーとゆつて

「「……せりへー。」

俺は黙然とする。

もちろん春もだ。

何を言ひつかと思えば…

可愛いとかちつこことか…

「うー、 鼻月い！男の俺たちに向かつて可愛いってなんだよー！しかもちつこいつてえ！ 鼻月の身長分けるよおー！」

春が泣き真似をして、ふざけながら鼻月に言ひつい。

… そりなんだよな。

春はこじらこじらキャラだからいつも周りに人が集まつてて、賑やかなんだ。

常に笑いの中心にいる。

俺は泣き真似をする春を見ながら、一人感心する。

そんな俺たちを、皐月は可笑しそうに笑いながら見ていた。

俺たちよりも背が高い皐月は、少し腰を曲げて頭の高さを俺たちに合わせると、俺と春の首に左右それぞれの腕を回し、その腕で頭を包むようにする。

「 「 …… ツー？」 」

突然のこと、俺たちは田を丸くする。

だが、皐月はそんな俺たちを気にもせず、更に包んだ頭をクイッと寄せて、自分の頭にくつつける。

「えつ、と…皐月？」

「お、おいつ…、いきなり何すんだよ？」

俺たちは驚きを隠せない。

皐月の端整な顔が目の前にあって、顔が熱くなつていいくのがわかる。

俺と春の顔は、案の定真っ赤だ。

そして臥月は少し頭を離して、ふわっと微笑みながら言ひ。

「ああ、なんか2人が可愛かつたから、つい」

俺たちの顔は、一気に温度を上げる。

「……？」

顔を赤くしながら黙つてしまつた俺たちを、臥月は不思議そうに見ている。

漸くその視線に気付いて、はつとしたように2人で口を開いた。

「はつ？！なつ、なんだよそれ！」

「おいつ、俺は可愛くなんかないぞ！－」

黙り込んだと思ったら、ぶーぶー文句を言い始めた俺たちを見て、
皋月はまた可笑しそうに笑った。

暫く笑いながら3人で話してると、何故か周りが異様な空気になつて
いることに気付く。

「…な、なあ？俺たち、なんか囮まれてないか？」

2人の袖をクイクイと引っ張りながらそう言つと、春と皋月もここで漸く周りをぐるつと見渡した。

「お、なんか俺ら、クラスの注目の的だな」

一瞬驚いた顔をしたが、すぐにニーニーニ笑つて、視線が集まることに慣れているように言つ皋月。

「うわっ、すげえ…、イケメン揃い…」

と、周りの人たちがイケメンなことに、驚きながら言つ春。

…お前はやじかよつ！

心の中で俺は春につつじみをいれる。

もつ今更だとは思つが、春はイケメン好きだ。

ホモ…とかゆうわけでは、ないと思つんだけどな。

多分バイってやつなんだろう。

まあ俺自身、別に偏見はもたないからホモでもバイでも、全然気に
はしないんだけどさ。

好きなもんは好き！

それでいいじゃん？

なんて。

こつして俺たち3人は、それぞれいろんな意味で周りを見渡してい
た。

すると突然、ビニから軽快な声が聞こえてくる。

「つたくも～、君たち3人がそんなクラスの真ん中でじやれ合つてたら、視線集めちゃうのなんて当たり前じゃーん」

その横の主は明るく笑つて、あさはつと笑つ。

「……え、誰？」

「ビニから喋つてんだ？」

ポカーンとする俺と春。

キョロキョロと周りを見るクラスメートたち。

「…………」

そんな中、皇月だけはやれやれとこいつよつた表情をして微笑んでい

た。

気のせいかな？

俺には何故かその皐月の表情が、愛しいものを思い浮かべているような表情に見える。

：まあ、いいか。

シーンとした教室にまた明るい声が響く。

「まつたく。さつきから見てたけど、3人ともほんと美形なんだ
からさつ」

そう言いながら、さつき突然言葉を発したであろう人物が、座っていた教卓からトン、と降りると俺たちを囲む輪の中に入ってきた。

俺たち3人に近づいてきたその男は、スッと皐月のすぐ右隣に立つ。

それがこれまで、なかなか整った顔つきだ。

そして、でかいと思っていた皐月よりも、更に2、3cmでかいくらいの身長。

……何者だ。

そんなことを考へて、その男は左手で皐月の腰を引き寄せ、右手でその顎を捉えていた。

顔と顔の間は、もう鼻が触れる程に隙間がない。

僅かに上を向かされた皐月の顔に、その男の少し伸ばされた赤みがかつた茶色い髪の毛が触れる。

摑つたそうに目を細めた皐月に、その男は口端を上げて怪しく笑いながら呟つ。

「氣をつけないと、きっと3人ともすぐ襲われちゃうよ？」

……は？襲われる？

俺と春は目が点になる。

だが皐月はそんな俺たちを他所に、意外に驚きもせず呆れた顔をしながら淡々と返す。

「…いたぐ。おい」「ハ、離れろ変態野郎。お前が一番怖いよ」

今のこの状況に、全く驚いていない。

「うーん」とためらふ。「うーん」とためらふ。元々は慣れているんだとか?

いろいろと不思議に思いながら、俺と春は互いに顔を見合せた。

「そんな冷たい」と言わないでよ~。キスしてあげよっか?」

「バ力野郎」

「にて」

クイッと顎を上げられた皐月は、パシッと男の頭を叩いていた。

バカ野郎と言いながらも、皐月の顔はほんのり赤くなっているようにも見える。

なんだろ?、この2人…。

凄く画になる。

それより、そういう関係なんだろ?か?

俺と春は、ぼーっと2人のやり取りを見つめる。

もちろんイケメン好きの春は、顔が赤くなっている。

クラスメートたちの視線もこの2人に釘付けだ。

それもそのはず。

2人とも背が高くてスタイルはいいし、端整な顔つきだ。

その上、無駄に色気を放っているのだから、注目の的になるのは当

たり前。

そして漸く皐月が俺たちの視線に気付く。

「ああ、じめんじめん。」いつ、俺の幼馴染み。見ての通り変態だから2人とも気をつけろよ」

と囁きの皐月。

なるほど、幼馴染みか。

皐月がああいつことをされても慣れていることに、やつと納得がいつた。

「んもー、変態変態つて酷いなあ。 Bieber、皐月の幼馴染みの忍乃秋斗でーす」

皐月に文句を言いながらも明るく自己紹介をする。

そして忍乃秋人は俺と春の目の前に立つと、ポン、と俺たちの頭に

手を置いた。

「よろしく。秋人って呼んでね、子猫ちゃんたち？」

「…………なつ」

「子猫ちゃんたちって……」

自分がでかいからってバカにしてんのかつ！

俺たちはむつと秋人を睨みつけてやる。

そこへ堀川が止めに入る。

「おい、やめとけよ

「だあつて可愛いんだもん！」の二人へ

……だから可愛いくてなんなんだよ。

皋円も皋円で止めに入つておきながら笑つてゐるし…。

ところが、皋円もさつ もんなん理由で同じよひなことしてただる。

ん？ そういえば、やつ きから可愛に可愛にって言われてるけど、春
も可愛にほつ の部類にはいるのか？

俺は母ちゃん譲りの中性的な顔つきで、（認めたくないけどー） 可愛
いって言われることもある。

認めたくないけどな！？

そんな俺にとって、春はイケメンで格好いい部類だった。

羨ましいって思つてた。

だから俺は、春に可愛いって言葉はしつくじこない。

やつぱり身長だらうか？

身長が高い2人からみて、小さめな春は可愛い部類になるんだらう
か？

あーもうつー

「おおくしゃうつーー！」

「お前ら何こだつーー！」

……あつ、しまつた。

目の前で笑うでかい2人になんだか腹が立つて、思わず俺まで聞いてしまつた。

聞いたら逆に、自分たちががっかりしてしまいそうな気がする。

答えなくていい、答えてくれるなーー！

と思つても、聞いてしまつたのは俺たちだ。

「185へりいかな

「俺188へりいかな

。

「それじゃ、いいで

顎に右手をあてて、少し考えるよりこしながら答える星月は、やっぱり俺たちよりっこくでかい。

「一二二二」と笑いながら答える秋人は、やっぱり星月よりもっこくでかかった。

「　　はあ～…」

俺と春は同士に溜め息を吐き、やつぱり聞かなきゃ良かった、と後悔した。

そんな俺たちを、首を傾げて不思議そうに見る星月と、え～？なになに～？と聞いてくる秋人は無視して、俺と春は互いに慰めるように肩を叩き合った。

「また明日な」

あれから教室を出て、校門までの長い道を、春と皐月と秋人と俺でわいわい騒ぎながら歩いてきた。

帰路が分かれるからと、校門のところで俺と春は2人に手を振る。

「おつ、またな」

「じゃあね~」

皐月と秋人も、俺たちにそう返して手を上げた。

背を向けて帰っていく2人の姿を見て、俺たちも2人とは逆の方向に歩き出す。

「は～それにしても、イケメンが多いって噂、本当だつたんだなあ」

春が幸せそうに溜め息を吐きながら囁く。

「ほんとイケメン好きだよな、春は」

俺は少し呆れながら呟つ。

「だつてイケメンは田の保養だよー可愛い海も、田の保養だけどな
ー！」

と言いながら、ガバッと俺に抱きついてくる春。

「つたく、バカかお前は」

そういうながらも、相変わらずおもしろいやつだと思つてしまつ俺
は、ずっとここに親友でいたいと思つた。

「せういえば海、生徒会長様見たか？」

「は？ 生徒会長、様？」

ポカんとする俺。

「なんだ見てないのかよ？入学式に壇上で祝辞のスピーチしてただら？」

「んー…見てないな。多分俺そのとき沈んでたから」

呆れたように聞いてくる春に、俺は笑って返す。

そう。

返事に失敗してからは、気分が沈んでて、その後の入学式の記憶がない。

見てないものは、しょうがないのだ。

「その生徒会長がどうかしたのか？」

呆れた視線を向けてくる春に、次は俺が聞き返す。

「ああ！それがそれがっ、めちゃくちゃイケメンなんだ！藤堂雅トウヤマユミヤヒ様！」

何を言つのかと思えば…

またそりこり話か。

しかも様とかつけやがつて、ちよつと興奮してやしないか？

「凄かつたんだぜ、壇上に上がったとき！一年生は初めて見るのに見惚れるだけだったけど、2、3年生からは黄色い声があがつてさあ！」

…いやいや、黄色い声つておかしいだろ。

「いじ男子校だろ？」

一人眉間に皺を寄せる俺に構いもせず、春はどんどん話を進めていく。

「なつ、俺たちも生徒会にはいり—ゼー明日言つてに行ひやー。」

「…はつ？何勝手に話進めてんだよお前はー。」

生徒会なんてそんな面倒臭そつなの、俺はやりたくないぞー。

「なあ、お願ひ……一緒に生徒会はこうぜ？」

パンツと顔の前で手を合わせてお願いしてくる毒。

なんだか断れない。

俺は、はあつと溜め息を吐く。

「……っただく、わかったよ。明日^{明後日}^{二日後}に行こう！」

そつ^{さすがに}毒の顔がパツと明るくなつて、俺に抱きついてきた。

「あつがと海——むすびお前は最^{さい}高^{こう}の親友だなー。」

やつ^{さすがに}俺をギュウギュウ抱き締めてくる。

「うふ、咲^{さき}こー……」

「あ、わついー嬉しくてつっこ締めすました」

「つたへ、お前は」

「つへへ」

こうしていろいろな話をしながら歩いていたら、いつの間にか豪華な家がいくつも並ぶ住宅地まで来ていた。

道路をはさんで向かえ合わせになつている俺たちの家の前に辿り着く、「また明日な」と言葉を交してそれぞれ家に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045p/>

15-苺-

2010年11月29日18時55分発行